特集

自然から学ぼう

夏がやって来ました。子どもたちが楽しみにしている夏休みももうすぐです。海、山、川―。私たちの住む三原市は、豊かな自然に恵まれた場所。ちょっと出掛ければ、身近にある自然に触れることができます。この夏、子どもたちと一緒に、自然から学んでみませんか。

自然から遠ざかる子どもたち

地域の大人たちと話をすると、昔の三原の自然について、たくさんの話を聞くことができます。子どもの頃は、誰でも入ることができた山や林があちらこちらにあり、そこで秘密基地を作って、虫取りをしたとか。川に飛び込んで魚を捕まえ、海の浅瀬で貝を掘ったとか。豊かな自然についての懐かしい思い出話です。

今、時代の移り変わりとともに、子どもと自然の関わりは、希薄にならざるを得ない状況にあります。都市化や少子化、物質的な豊かさ、地域とのつながりの希薄化といった社会構造の変化は、こちらが望まなくても、子どもと自然との距離を遠ざけてしまいました。

この状況は自然の宝庫のような三原で暮らす子どもたちも、例外ではありません。

大切な自然からの学び

最近は、子どもが家の外へ出て、自然の中で遊ぶことが減ったといわれます。テレビゲームやカードゲームなど、家の中でも

楽しく遊べるたくさんの道具があるのも一つの要因です。

自然との関わりの中には、子どもの成長にとって大切な要素が数多く含まれています。自分を取り巻く身近な自然の仕組みの面白さを知ること、不思議さや美しさ、怖さに気付くこと、さらに興味を持って深く探究することは、子どもが成長する上で、さまざまな良い点をもたらしてくれます。

また、自然の中で遊ぶことは、自然への理解や知識が深まるだけでなく、自分の住む地域や郷土について、実体験を通じて知ることにもつながります。

自然の中で豊かな心と体を

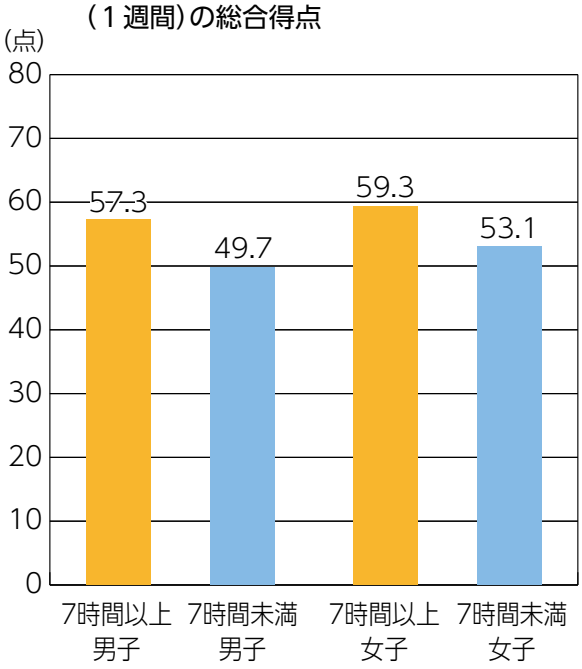
自然の中で体を動かし、運動することは、子どもの心と体を豊かに発達させます。スポーツも含めて、屋外での活動や遊びが体力向上につながることは、小学生の体力テストの結果にも表れています（図1）。

子どもたちは、たくさんの仲間と一緒に自然の中で遊びながら、さまざまな体験を通して、協調性や規範意識、思いやりの心を身に付けていきます。地域の人など、年齢の違う人と過ごすことで、他人との接し方を覚えます。

また、学びや遊びの道具をあらかじめ用意されていない、自然の中での体験学習は、その場の状況に合わせて、考えたり、工夫したりする必要があるので、チャレンジ精神や創造力を育むことにつながります。

何も遠くへ行く必要はありません。きっかけはすぐそこにあります。市内にはちょっと出掛ければ、自然やそこに住む生き物の息吹を感じられる場所がたくさんあるのです。

図1　小学生の体力テストにおける運動時間別（1週間）の総合得点



（平成25年度 文部科学省による調査の結果）

▲6年生は竹を伐採するなど、森づくりに取り組みます

多様な生き物が住む豊かな森をめざして

～オオムラサキを守る活動から学ぶ～

南方小学校

◀先月、校舎に飛んできたオオムラサキ

「とうとう見つけたよ！」「角（つの）があるから間違いない」。5月下旬、南方小学校の学校林に子どもたちの大きな声が響きました。見つけたのは、特徴的な角を持つ緑色の大きな幼虫。図鑑で調べてみると、それが国蝶で絶滅危惧種にも指定されている大型の蝶、オオムラサキの幼虫であることが分かりました。

豊かな自然に恵まれた本郷町南方。南方小学校の周りに広がる里山にも、たくさんの生き物が生息しています。春はウグイスなどの野鳥が毎朝のように美しくさえずり、夏はカブトムシが教室に飛び込んでくるといいます。

こうした豊かな自然を生かし、南方小学校では全学年で自然と環境をテーマにした学習を行なっています。

アサガオの成長を調べる1年生。2年生は学校林や校庭で生き物を見つけて世話をします。3年生は学校林で生き物が互いに助け合って生きる共生について学び、4年生は毎週ドングリの大きさを計測して成長の速さを調べ、生き残り戦略を研究します。

五感で気付き疑問を持つことの大切さ

学習で大切にしているのは、目で見たり、手で触ったり、匂いを嗅いだり、自分の五感を使って気付くこと。そして、「なぜ緑色のバッタと茶色のバッタがいるのだろう」「なぜアリとアリマキは一緒にいるのだろう」など、疑問を持つことです。答えを探して、観察し、調べ、考えて判断することで、科学的な物の見方や自然への理解を深めています。

5・6年生は、もともと南方に生息しているオオムラサキを守る活動に取り組みます。5年生が行うのは、オオムラサキを学校林に呼び寄せる誘引実験。生態をよく研究し、いろいろな食べ物などを混ぜた装置を考えて作り、学校林に設置しています。

6年生は学習の集大成として、オオムラサキが住める森づくりに取り組みます。森の水分や日光を独占してしまう竹を伐採し、オオムラサキの幼虫が葉を食べるエノキ、成虫が樹液を吸うクヌギやアラカシなど、さまざまな植物が生育する森を整備しています。

▶4年生がドングリの生きる力について発表しました

オオムラサキを守ることはさまざまな生き物が住む森を守ること

南方小学校の取り組みは、単なるオオムラサキの保護活動ではありません。保護だけを目的にするなら、ネットで囲んで生息地を隔離したり、幼虫を集めて飼育したりする方が効果的です。しかし、子どもたちがめざすのは、もともと南方にある生物多様性の森を守ることです。

絶滅が心配されるオオムラサキは、生息地にさまざまな動物や昆虫、植物、細菌などがいないと繁殖することができません。オオムラサキが住める環境をつくることは、たくさんの生き物を育む豊かな里山の雑木林を守ることにつながっていきます。「たとえオオムラサキが来なくても、なぜ来なかったかを考えてほしい。それも本当の意味で自然を理解することにつながる」。校長の西本 真由美さんはこう話します。

人と森とが深く関わり、さまざまな生き物が豊かに住める生命の源をめざして。子どもたちの挑戦が続いています。

▲椋梨川の川面を舞うホタル

地域で自然と人の関わりを学ぶ

～星空とホタルに願いを込めて～

大和町椋梨

先月15日、大和町椋梨の旧椹梨小学校に、地域の子どもや大人約110人が集まりました。夕方から行われる、ある観察会に参加するためです。テーマは、夏の星座とホタル。地域で自然や宇宙への関心を高めてもらおうと、椹梨自治振興会と地域おこし協力隊が催しました。

会場には、ドーム状のテントの中で星座を観測できるデジタルプラネタリウムが設置され、夏の夜空で見ることができる星座を観測しました。「夏休みには本物の星座を見つけたい」。観測を終えた子どもたちは、目を輝かせて話していました。

もう一つの主役はホタル。以前から、大和町では地域にホタルを残す活動が熱心に取り組まれてきました。

その中心となっている場所が、椋梨川の流れる椋梨地区です。そこにあった旧椹梨小学校は、ホタルを卵から幼虫にまで育て、川へ放流する活動を続けてきました。そして、その取り組みは統合された大和小学校へと受け継がれています。

観察会では、日が暮れるのを待って椋梨川の川岸へ出掛けました。岸辺をほのかに照らす緑色の光に、あちこちから上がる歓声。全員が時間を忘れて闇夜を舞うホタルを見つめました。

大和小学校でホタルについての学習を指導する満汐良法さんは話します。「ホタルが住めない場所では、人も暮らすことができないのです。子どもたちは学習を通じ、自然と人の関わりがどれほど深いものか実感していると思います」。

この日、椋梨川を乱舞したホタルは、これまで子どもたちが育んできた自然を愛する心と、それをサポートする地域の大人たちの熱意のたまものです。

◀デジタルプラネタリウムも子どもたちに大人気でした

水環境の大切さを学ぶ

水辺・海辺教室

たくさんの生き物を育み、地域の生態系を維持する大切な水。私たち人間も、飲料水や魚や貝などの水産物を得ている大切な資源です。

市では、私たちの暮らしに欠かせない水環境に触れ合い、自然に関心を持ってもらうとともに、地域や地域の環境について考えてもらうことを目的に、市内の河川と瀬戸内海を拠点に水辺・海辺教室を開催しています。

今年度は、11校の小学校で教室を実施しています。子どもたちは、水辺や海辺で生き物を採取し、図鑑と見比べながら名前や生態を調べ、種類ごとに分類し、確認できた生き物で水のきれいさを判断しています。

水辺・海辺教室は、申し込みにより参加できる教室もあります。詳しくは、7ページを参照してください。

問 生活環境課 ☎0848・67・6192

▲先月10日、鷺浦小学校で実施した海辺教室

水辺・海辺教室で指導する 岡田和樹さん

三原市は、川と海、そして山や森など、豊かな自然に恵まれた自然を学ぶには絶好の場所です。時代の変化とともに、子どもたちと自然との関わりは少なくなっていますが、自然と人は絶対に切り離せないものです。まずは自然の中で遊ぶことから、自然との付き合いを始めてほしいです。